

### <総括>

試験時間	120分	総解答字数	1400字+α
------	------	-------	---------

本年度は大学での学びと重要な知の要素や役割、知と政策の関連をテーマとした出題がなされた。第4次産業革命、あるいはAI革命が進む中で、日本政府は、2030年をめどとしてSociety5.0の実現を目指すこととしている。分野横断的な知の役割はどんどん大きくなっている。そうした中で、小中高のカリキュラム改革や入試改革なども進められてきたが、昨年は国を挙げてのDXの必要性が叫ばれ、労働者のリスクリング政策も発表された。こうした社会的文脈の中で大学における学びの意義や役割が改めて問われるようになっているというのが出題の背景にあると考えられる。

興味深いのは、これまで割とSFCにおける学びのありようは問題発見・問題解決であると強調されてきたのに対して、「そもそも、問題の発見・解決が大学における学びのすべてでもない。では何のために学ぶのか。学びとは何か。」というより根源的な問いかけを行っている点である。

また、読書論についての資料③④が与えられており、学びの方法を問うものとなっている。資料文は挑発的な読書論を展開している。ただ、今年、総合政策学部が、『シリーズ 総合政策学をひらく』を刊行していることからすると、読書することを大学は当然求めているが、どのように読むのかも問っている。

全体としての難易度については、本年度は、文章が短くなり、また問2では自分で政策の事例を選べるなどの点から易化したと判断できる。

慶應義塾大学総合政策学部では、例年、学部特性の強い出題が行われている。また最近では、資料を適切に処理するだけでなく、自分なりの独自の発想を問うようになっている。小手先の論文作成テクニックでやり過ごせるようなレベルの設問ではなく、適切に自分が設定した主題を論じることができるかどうかを正面から問っている点で骨太の良問が出題されている。

<課題文の分析>

大問番号	
内 容 (主題)	知のあり方と大学教育
出 典 (作者)	文章①J.S.ミル『大学教育について』(竹内一誠訳) 岩波文庫 (2011年) から抜粋 (原典はミルの英セント・アンドルーズ大学名誉学長就任講演 1867年2月実施、一部改変) 文章②一般社団法人 日本経済団体連合会 提言「新しい時代に対応した大学教育改革の推進——主体的な学修を通じた多様な人材の育成に向けて——」(2022年1月18日、一部改変) 文章③ショーペンハウアー『読書について』(鈴木芳子訳) 光文社古典新訳文庫 (2013年) から抜粋 (原典は1851年、一部改変) 文章④ピエール・バイヤール『読んでいない本について堂々と語る方法』(大浦康介訳) ちくま学芸文庫 (2016年) から抜粋 (原著は2007年刊行、一部改変)
長短・ 難易等 前年比較	長短 (短い・ <b>やや短い</b> ・変化なし・やや長い・長い) 難易 (易化・ <b>やや易化</b> ・変化なし・やや難化・難化)

<大問分析>

大問	出題形式	テーマ・課題文の内容	設問	設問形式	解答字数	コメント (設問内容・論述ポイントなど)
	課題文	学部系統的	問1	その他	600文字以内	(1)文章①～④のうち、少なくとも3つに具体的に言及し、大学での学びにおいて重要だと考えるものについて600文字以内で論じる。その際に、それぞれの文章の内容に賛成する必要はない。批判的検討や反論も歓迎される。
			問2	論述	(ア) 指定なし  (イ) 800文字以内	(ア) 問2の冒頭の欄に、社会における「知」として最も重要だと考える要素や役割を簡潔に示す。  (イ) そのうえで、今日の世界における政策——日本でも海外でもよい——の具体的事例を2つ挙げ、(ア)で示した「知」がどのように活かされているか、あるいは活かされていないかを含め、800文字以内で論じる。

※出題形式は「テーマ・課題文 (英文を含む場合は付記する)・図表・その他」

※テーマ・課題文の内容は「一般教養的・学部系統的・教科論述的・その他」

※設問形式は「論述・要約・説明・分析・その他」

## ＜答案作成上のポイント・学習対策等＞

## ○答案作成上のポイント

## 問1

設問の要求は例によって細かいのでそれに応じる形で論じていけばよい。まず、設問のリード文の中に資料を関連付ける際の重要なヒントがあるのでそれをきちんと踏まえることが重要だ。そして、3 つ以上の資料に言及しながら自分の見解も述べなければならないので、コンパクトに論じていく必要がある。その際には自分なりに軸を設定して、首尾一貫したストーリーを作るようにしたい。

## 問2

(ア)基本的には問1で文章①～④について言及する中で取り上げた内容に関連することがらをあげる方が無難である。

(イ)日本や海外における今日の世界における政策の具体例を2つ挙げるよう求めているが、何をもって2つとするのか明確には述べられていない。自由度が高いので、設問の要求に答えつつ、自分なりの観点から、的確に論じられる政策を取り上げるのがポイントになる。また、③と④のどちらか、あるいは両方に言及するように求められているので関連付けて論じられる事例を選ぶ必要がある。

## ○学習対策

慶應義塾大学総合政策学部では例年学部特性のきわめて強い出題が行われている。一貫して問われているのは問題発見・問題解決能力やそれと結びついた政策科学の基本的な理解と資料を批判的・創造的に活用する力、データ分析力、社会イノベーションを生み出す柔軟な発想力などである。ようするに大学入学後に、主体的に研究を進めていくことのできる基礎力が備わっているのかを単刀直入に問うのである。

難易度は高いので、高校までの学習だけでは十分ではない。特に現役生は時間がないため小論文対策を後回しにしてしまいがちであるが、それでは対策が間に合わなくなるおそれがあるので、早くから計画的に取り組んでほしい。

社会科学や政策科学の基礎を学んでおくとともに、新聞などにきちんと目を通し時事問題についてたんに漠然と知っているだけでなく、科学的に分析できる力をしっかりと養いたい。また総合政策学部ではどういった研究が行われているのか、またどういうカリキュラムの下で自分は研究を進めていくのか理解を深めたい。そしてその上で過去問を解き、実践的な力を身に付ける必要がある。過去問を解いていく上では、どのように長い資料を適切に処理して、解答を作っていけばよいか練習を積むとよい。

大学院レベルの学びを行えるとするSFCでは1年次から主体的に研究を進めていくことが求められている。それゆえ、小手先の文章作成スキルではなく、大学での研究を行っていくことのできる土台を受験生がきちんと作っているかどうか正面から問われるのである。こうした土台を河合塾の小論文の授業を通じて地道に養っていくことが不可欠である。河合塾の小論文ではレギュラー授業から夏期講習や冬期及び直前講習まで、段階的かつ体系的に対策を積むことのできるカリキュラムが整っているのも、ぜひ有効に活用してほしい。